

『玉造小町子壮衰書』拾穂の記

枅尾 武

(一)

この度は昨年出版した『玉造小町子壮衰書の研究』(一九九一・三臨川書店 以下研究と略す。)の落穂を拾うことにしたい。誤字脱字も少なからずあり、これは別の機会に訂正したいと考えている。

季吟は『伊勢物語拾穂抄』を著したが、これは先人の業績に対して謙遜の意を込めながらの大著であるが、小稿は文字通りの拾穂に過ぎない点寛恕願いたい。

現『玉造小町子壮衰書』(以下壮衰書と略称する)は平安中期から院政期にかけて成立したものとされている。この書がどのような構想のもとに創作されたかは定かでないところも多いが、思想的には仏典に依る。例えば『出曜経』(注上)無常品に世尊(釈迦)が羅閱城(マガダ国の首都)の迦蘭陀竹園に居た時、父の真浄王と後園(城の後の広場)に出て外の様子を觀看した時の王と比丘との会話がある。

比丘、我時至後園觀看、見有老人。形衰色変、皮緩面皺、拄杖

呻吟、氣力枯竭。時間御者、斯是何人、形衰色変、乃至於斯。御者報曰。此是老人。太子問曰、何謂為老。御者報曰、所謂老者、形衰年邁、伺命旦夕。衰耗之法漸近死趣、故謂為老。我時比丘、復問御者、吾亦當復有此衰耶。御者報曰、尊及人天皆有斯患無免此者。時我自念、夫人受形皆有此患。貧賤富貴皆當有此。時我比丘竊説偈曰、少時意盛壯、為老所見逼。形衰極枯槁、氣竭憑杖行(比丘よ我(王)、後園に至り觀看せし時、老人有るを見たり。形衰へ色変り、皮緩み面皺む。杖拄き呻吟し、氣力枯竭せり。時に御者に問ふ。斯は是、何人ぞ。形衰へ、色変り、乃し斯に至るか。御者報へて曰く、此は是、老人なりと。太子(釈迦)問ひて曰く、何を謂ひてか、老と為すと。御者報へて曰く、所謂老とは、形衰へ年邁い、命伺つこと旦夕なり。衰耗の法漸く死趣に近づく、故に謂ひて老と為すと。我(王)時に比丘よ、復御者に問へり。吾亦当に此の衰有るか。御者報へて曰く、尊及び人天皆斯の患有りて、此を免るる者無しと。時に我、自ら念へらく、夫れ、人形を受くれ

ば、皆此の患有り。貧賤富貴皆当に此有るべしと。…時に我
 (王)比丘よ、竊かに偈を説いて曰く、少時意盛壯なるも、老
 の為に通見^{すま}る所となる。形衰へ枯槁を極め、氣竭き杖に憑りて
 行くと。

ここに述べられている死生観については研究(御面皴・御生老病
 死注)にも引用した『仏説四不可得経』や『首楞嚴経』『過去因果
 経』等の仏典に繰返し説かれるものである。

また死して貪欲を除き、惑業を離れるために屍体の変化を九種に
 観想する九想観^{くうかん}がある。空海の『九想詩』(性靈集十一川)や蘇軾
 に仮託される同名の詩もまた壮衰書に相通するものがある。伝蘇軾
 (四六一二〇)の『九想詩』^(注3)がいつ作られたか明かではないが、壮
 衰書への影響は時間的に無理があらう。

一方、極楽往生を希求すること(特に詩の部分)では浄土三
 部経特に『観無量寿経』の影響が大きいことは前の研究で既に述べ
 た通りである。また源信の『往生要集』^(注4)の影響が言われている。こ
 の作品は極楽往生について説かれた經典の集大成であるから当然極
 楽往生を述べた壮衰書の内容に類似したものがあったとしても不思議では
 ない。

次に壮衰書の手本となるべきものの原拠として162頁に楽天の秦
 中吟の詩に学び幸地の魯上詠の賦に效つたとすることである。白居易
 易字は楽天(七七一八)の『秦中吟』^(注5)は『白氏文集』巻二に収める
 諷諭古調詩五言十首并に序を指すものである。壮衰書の作者が白居易
 の愛好者であることは周知の事実である。壮衰書の書の字は記と
 した本があるが、長文の序を持つ古調詩である。『秦中吟』もまた
 同じ形式を持った詩である。ただ語彙を比較するとほとんど類似点

がない。これは幸地の魯上詠の賦と対にするために便宜上用いられ
 たものである。二つを並べてみれば一目瞭然である。

楽天・秦中吟之詩 幸地・魯上詠之賦

前の研究において白楽天に対する曹植と考えたのであるが、真偽
 は別として楽と幸、天と地は対として工夫されたものである。同じ
 く秦と魯は地名を対にしたものである。吟と詠、詩と賦、いずれも文
 体を対にしている。

詩における対は非常に重要な意味を持つ。白詩中最も強く壮衰書
 に影響を与えた作品の一つ選ぶならば「長恨歌」であらう。長恨歌
 には同じ唐代人の陳鴻(八一三年前後在世)の作の長文の序「長恨
 歌伝」を付す。序(伝)と詩が別人の作である。壮衰書も序と詩の
 作者が別人の可能性があることは前の研究の「書名考」(B)彰考館蔵
 『玉造小町子状^仕衰書』に述べておいた。彰考館本は先の研究の底本
 にした鎌倉中期写九条家旧蔵東京大学蔵本に次ぐ古写本であるが、
 序と詩に付された題名や字体に差異が認められるのである。別々に
 作られた序と詩が長恨歌の例に類似しているように思えるのであ
 る。

これも既に述べたのであるが詩であるのに書かないしは記と題して
 いることである。長恨歌は詩が前に作られ序が後から付されたので
 あるが、壮衰書は序が先ず作られ独立していたものに詩が付された
 と考えるのである。今充分証明する時間はないが、この仮説はかな
 り高い可能性を持っているように思える。

一つ注意すべきことは序は詩の部分程浄土色が濃くないことも序
 と詩との別作説を考える時重要な鍵となるのではなからうか。

(二) 陽明文庫蔵伝弘法大師空海筆小野小町像再考

前の研究において陽明文庫蔵小野小町像を影印することができたが、その識語（影印本書誌に翻字）に連歌師紹巴（大永四〇三五〇）慶長七八（三〇三〇）がこの画像を入手したことが記されている。次いで玉造一編の書を入手した。これが慶応義塾大学図書館蔵江戸初期写の『玉造小野子壮衰書』の親本であったという考えを述べておいた。

紹巴は織田信長や明智光秀等の武士や公卿・僧侶と広く親交を結んでいた連歌師である。甫庵の『信長記』の永禄十二年の記事に、

九月二十八日に信長卿、東福寺につかされたまひければ、かねてのひやうちやう（評説）こそ、何事もいみじけれ。やがて當時連歌の宗匠ぜうは（紹巴）并（に）しやうしつ（昌此）心前、くすし（医師）にはなから井ろあん（半井臘庵）、ならびにすいちくあん（雖知苦院）道三、其外諸道に名を得たる者ども、又上下京のとしよりといふて、かりそめの事にも出て、ひようぎ（評議）するものども、いろ／＼のさ／＼げ物して御礼申あぐる中に、ぜうは（紹巴）、すへひろ（末広）がりのあふ（扇）ぎ二本、だい（台）にすへて直にさ／＼げらる。いかにと見るところに、御前につゐいて、かみしもをもとりあへず二ほん手にいるけふのよろこび

と申されければ、信長卿

まひあそぶ（舞遊）千世よろづよ（年代）のあふぎ（扇）にてとつ（付）けたまひけり。洛中の老若（ちやうじやく）これを聞て、なにとも、ものをばいはず、この人はたけきものゝふ（武士）なれば、しゆえ

い（舟水）のいにしへ、木曾（注12）か京入したるやうにこそあらめとおもひしに、ゆう（優）にやさしうも有けるよな、さてはやすき事もあるべきにやと、心のうちほぶたのもしう成て、皆いき（息）をぞやすめける。（古典文庫上四頁、一部濁点を加える）と見える。この信長が天正三年（三五五）八月二十八日、奥平九郎家正に玉造小町の老衰図を後藤光乗に彫らせた目貫弁を与えたといふ。

自、信長公九八郎拜領の刀、目貫かうかいは、去々年後藤光乗（に）仰（せ）付け、於（三）京都、被（レ）為（レ）彫。昔弘法大師の玉造と云（ふ）双紙を絵に被（レ）書置。女は耽（レ）色者なれども、老年になれば、面は猿に似て手にあじか（籠）を持、其中にくわゑ（慈姑）、蕨など入、肘にかけて居たる躰被（レ）書。信長見（レ）之、給（ひ）、如（レ）此図を可（レ）写と依（レ）御説、ほりたる目貫かうがい也。さて謡に今の世に周く用（ふる）間、三方論議の僧、数珠を持つたる所を学（び）たり。其比此図を明智日向守（光秀）、狩野（に）絵像にうつさせしに、悉出来して、眼に点入（る）までに有しに、一夜の内に此絵くらりたり。此由明智にかの（狩野）申ければ、権者の筆跡を凡夫として写しけるに依（レ）て如（レ）此、奇特と云云（『当代記』一部傍訓及び送り仮名を加える。）ここにいう玉造の老衰絵図は紹巴所有の小野小町像（陽明文庫蔵）と一致する。

奥平九郎家正は徳川家康の臣。天正三年三河の長篠城を徳川・織田軍の將として死守し、武田勝頼に大勝した。この時、信長より信昌の名を与えられている。刀の拝領もこの時であろう。

後藤光乗は裕乗から教えて四代目。装剣金具の三所物である小

本文は「香花一炬燈一盞、白頭夜礼仏名経」（香火一炬燈一盞、白頭夜礼す仏名経）である。道林禪師（鳥窠道林 七四一—八二四）は唐の人。白居易（七七二—八四六）とは同時代の人。『祖堂集』に引くような本文が存在したのではなからうか。壮衰書の作者もこのような本文を見ていたのではなからうか。『祖堂集』は五代南唐の保大十年（九五二）頃成立。

古賀英彦編『禪語辞典』（一九二七 思文閣出版）の「頭白齒黄」の項に宋・死心悟新（二〇〇〇—二〇〇七）の語録の「雲門云、首座在此、——作這語話（雲門云く、首座此に在りて、頭白く齒黄はめり。這語話を作れり）を引く。

禪門にこの句が定着していたことが伺える。その最初期のものが『祖堂集』であったと考えられる。現存最古本の『祖堂集』は高麗高宗三十二年（三三〇）開彫されたものが韓国海印寺に蔵され、花園大学で影印された。日本では後醍醐天皇、執権北条経時の時代である。これ以前に日本に伝来していたという確証がないので、『祖堂集』引くところの白詩が伝わっていた可能性を探る必要がある。真言僧濟蓮（〇三三—〇三六）の『弘法大師御作目錄』が信すべきものであれば『玉造小町書一巻』（壮衰書と同じものと考えたばあい）は濟蓮の没年の永久三年（二二〇）以前に成立しているのどこまで壮衰書の成立時を遡ることができるかにかかわる。また、「齒黄」「黄齒」の初出用例が白詩以前に有れば事情は変わってくる。

17 匍匐衢眼 俳佻路頭

右の兩句は対をなす。匍匐と俳佻、衢眼と路頭がそれぞれ対をなす。壮衰書の特色の一つに對句の多用がある。

衢眼については前の研究書の「釈疑」（二〇六頁）において私見

を述べた。しかし、釈然としないところがあったので改めて考えてみたい。衢（道の分岐点）と路は対語であり、眼と頭も対語と考えるのが自然である。頭は「ほとり」の意であり、眼もほぼ同じ意味にとるべきであろう。用語上の遊びもある。衢間とする本文があるが、間と頭では対にならないし面白くない。本来眼字を用いたとすべきであろう。このような用語法は壮衰書には珍しくない。

59 家裝瑠瑠 室粧瓊瑠

瑠瑠は前の研究の注及び釈疑に述べておいたが、その出典を『佩文韻府』の引く『逸周書』^(注18)（汲冢周書）に求めた。この周書は平安時代の藤原佐世（昌泰元年八〇九〇没）の編になる『日本国見在書目錄』の雑史家に『周書』八巻汲冢書を著録する。現行本文は晋の孔晁注本が流布している。この書の巻七、王会解五十九に「珠璣・瑠瑠・象齒・文犀・翠羽・齒鶴・短独」とあり、瑠瑠の語が見える。明の陳榮校漢魏叢書本、明の嘉靖癸卯（三三年八二五）刊本影印四部叢刊本、明の吳琯校古今逸史本は瑠瑠とする。清の盧文弨の抱經堂叢書本、朱彝尊『逸周書集訓校釈』等の校本は瑠瑠に改めている。瑠瑠と瑠瑠のいづれが正しいか決しかねるが、壮衰書の底本が「瑠瑠」としていることが当面重要である。

瑠という字が古今の辭書類には見当らぬが、瑠の誤りではないかと考えられる。底本の傍訓を見ると「タイマイ」となっていて、「ハイキ」に疑いを持ち異本により「タイマイ」に改めた経過が伺える。瑠は玉の名、瑠は瑞玉の名である。瑠瑠と瓊瑠は対をなす。瓊は赤玉の名、瑠は美しい玉であり、瑠・瑠・瓊・瑠はそれぞれ別の玉である。京大注本以下の諸本の瑠瑠はベッコウであって瑠・瑠の二物に対して一物である。そのため瑠瑠と瓊瑠とは対にするには

しっくりしない。瑇瑁とするのが正しい。

一言付記する。『初学記』二十七玉に、瓊華と瑇瑁を対にしてゐる。瑇瑁は古米剣や器物の裝飾に使われている。『逸周書』に近い書によって書かれたと思える。『史記』二十九貨殖列伝に「丹沙、犀、瑇瑁、珠璣、齒革」が見える。逸周書の校本が瑇瑁を瑇瑁に改めたのも理解できる。

71～80魚類について

この作品に見える魚類は積鯉と紅鱸、鮓鮓と翠鱒、鮓鮓と鮓鮓（鮓に改める）、鮓と鯛、鮓と鮓、鮓と鮓の六組十二種である。これらの魚が壮衰書の中でどういう意味を持つのかかなり微妙なところがある。

先ず積鯉と紅鱸である。積鯉は緋鯉の別名である。一般に料理に供されるのは真鯉である。積と紅の色を対にするための工夫であろう。鯉は中国原産ではあるが古くから伝わっているので日本の魚と考えて良い。

一方紅鱸であるが、日本や中国産の銀の鱗に白身のヌズキではなく、「松江鱸魚」であろう。鯛が四つあるように見えるので四鯉魚ともいう。カジカ科のヤマノカミである。鰓膜の上に橙色の筋があるので紅鱸と称したのであろう。日本では有明海に産するが、壮衰書の主人公が食したとは思えない。晋の張翰の故事に見える呉松江産の鱸魚とすべきであろう。

中国の四大名魚である黄河の鯉、呉松江の鱸魚、松花江の鮓、興凱湖の白魚が念頭にあったのかも知れない。当時は輸入したり遠方から運んで生魚の調理をすることは不可能であるから、対語にするための手段であろう。

鮓鮓と翠鱒も黄色の鮓に翠色の鱒であり、色の対語を作るためのものであろう。従って諸本鮓（貝の一種）鮓とするのは誤りである。

鮓鮓と鮓鮓も黄色の鮓と黄色の鮓である。鮓は日本ではオヤニラミといい、黄茶色の魚である。鮓は日本ではカツオであるが表皮は銀灰色で赤身の魚。これは鮮黄色の鮓魚（タイワンドジョウ）であり、中国では鮓と鮓は味のよい魚として珍重される。諸本鮓鮓を鮓鮓、鮓鮓等とするのは誤り。また鮓鮓を鮓鮓とするのも誤りである。

鮓と鯛において、中国で鮓魚と称するものに香魚といわれる日本のアユとナマズの二種がある。アユは中国では主として乾物にして食用にするが日本のように珍重しない。ナマズは中国では珍重するが、日本では特定の地域以外は好まれない。アユを鱸にして食用にするのは日本である。

鯛特に真鯛は日本では珍重するが、中国では普通魚である。調理の仕方は日本風であるが唐、五代の頃の調理法が必ずしも現代と同じではなからうから日本独特のものかどうか不明である。

鮓と鮓を乾物にして食用にする習慣は日本では珍しくない。鮓（ウナギ）と鮓（マグロ）も同じことが言える。

魚類を材料とした料理のはあい、すべてが日常生活を反映したものとはいえず、むしろ中国好みの材料に日本風調理を施しているように見える。

このことは鳥獸を材料とした料理についても言える。『遊仙窟』の表現を借りたものはしばしば見られる。82「鳳脯雉臠」は『遊仙窟』の「西山鳳脯」「雞臠雉臠」等がこれである。

果菜についてもそのように言える。93「東門五色瓜」95「燉煌八子之榛」97「大谷張公之梨」99「東王父之仙桂」、100「西王母之神桃」等当時口にするのできぬものばかりである。『遊仙窟』に「燉煌八子之榛、東門五色瓜」(醍醐寺本)、「太谷張公之梨」(『文選』潘岳「閑居賦」による)、「東王公之仙桂、西王母之神桃」等が見える。

往來物的性格の強い壮衰書にとって平安時代の生活を活写するよりは文章作法的な要素が強かったと考えられる。また舶來趣味も加わって文章に適度な調味がなされたのであろう。

111 漢主周公之妻未致其修

『白氏文集』二「歎魯」二首之二「季桓心豈忠、其富過周公」(季桓が心豈忠ならんや、其の富周公に過たり)に依ったと考えられる。

138 1-2 荆棘繁其内

荆棘と熟したばあい、棘字は棘とするのが正しい。『名義抄』に「棘カラタチ」(僧上51)、「棘オドロ、カラタチ」(僧下77)とあるように「ウバラカラタチ」と訓を施したものであろう。前の研究書において、白詩、文粹その他『左伝』襄公十四年「除剪其荆棘、驅其狐狸豺狼」其の荆棘を除き驅り、其の狐狸豺狼を驅らん」とする。棘は『名義抄』の例のように棘と通用させていたらしい。元來棘にイバラの意はあるが、棘には単字の用例が見当らない。「顛棘」はクサスギカヅラ、「棘菟」はヒメハギの如きである。

136 1-2 福根已死 禍葉自生

禍福を葉と根に例えたものである。東晋時代(三六一—四〇〇)に訳されたという『薩羅國經』(大正藏十四冊頁)に「快哉福根善心生焉」

(快なる哉福根善心生ず)の例が見える。これも対語にするためであらう。

218 1-2 薄田禾穰々 疎畝麥離々

「穰穰」の意を解するには「離離」の意が重要な鍵となる。離離は本来、稲や麦の穂が実って垂れる、または草木が繁茂するというのが本来の意。ここではまばらな意であらう。前の研究書では慶滋保胤の「池亭記」の「荒蕪眇眇秀麥離離」(荒蕪眇眇として秀麥離離たり)を引いておいたが、こちらは本来の意らしい。荒れた宅地に麦が穂を垂れたさまをいう。壮衰書のばあい薄田と疎畝であるので地味の瘦せた田畠をいう。ここに植えられた稲はまばらであり、麦もまたまばらと考えるのが妥当であらう。

穰字は諸本の読みが「キ」となっている。これは冀(希—まれ)がキの音であるのに引かれて禾を加えてキと読んだものであろう。穰は「スイ」と読んで、もち米をいう。「ヒ」と読めば種をまく意。穰をキと読み、まばらと訓むのは和製音訓ということになる。離離を「まばら」と解釈すれば和製の訓と言える。壮衰書の作者の遊び心からする用字法とも言える。

231 2 疎窓泣露暈々 232 2 惆悵送多時

『広韻』において暈(入声帖韻、葉韻と共用)は時(上平之韻、支・脂韻と共用)と韻が適合しない。暈と意味の通用する字で支韻との語は暈と暈(『広韻』上声旨韻のみ、『集韻』平声脂韻—支韻と共用を採る)である。諸本の暈を採るか暈に改めるべきであらう。これは意味の通用と字体の類似によるものであろう。

右は拾遺を尽したとはいえぬが細部については本年中に出版する予定の『玉造小町子壮衰書』の注及び補注が昨年末に完成している

のでそちらに譲りたい。

注

- (1) 出隴経は東晋の竺仏念(三三〇)〜四一七)の訳した教典。教訓的な偈頌と説話から成る。譬喩を多く含む。渡辺秀夫氏が「小野小町異譚——玉造小町子壮衰書攷——」(信州大学人文学部 人文科学論集一七号)の五「願文」表現形式の運用」に言及。
- (2) 九想観とは人の死骸が土に帰するまでの九段階の変相を観想すること。肉体の執着を断ち、無常を悟り解脱に至ること。空海の「九想詩」では、新死相・防眼相・青瘀相・方塵相・方乱相・瓊骨猶連相・白骨連相・白骨離相・成灰相の九相である。「大智度論」二二や「観仏三昧経」二、伝東坡「九想詩」等説を異にする。
- (3) 五山僧の作ともいわれる伝蘇東坡「九想詩」は室町時代以来謡曲や近世文学に影響を与えたことはよく知られている。江戸時代には「九想詩」(貞享二八(一六八五)刊)、山雲子(坂内直頼)の「九想詩諺解」(元禄七八(一六九四)刊)等松入注解本の他絵解・絵巻が多数行われている。
- (4) 『往生要集』の影響については注1の渡辺氏の論文六「仏典との関わり——『往生要集』他」に論及。
- (5) 「秦中吟」十首并序の序に「貞元元和の際、予長安に在り。聞見の間、悲しむに足るもの有り。因つて直に其事を歌ひ、命じて秦中の吟と為す」と述べる。今流布している作では譏嘲・重賦・傷宅・傷友・不致仕・立碑・輕肥・五絃・歌舞・買花の題を持つが、唐人連唐詩の「才調集」は貧家女・無名税・傷大宅・膠漆契・合致仕・古碑・江南早・五絃琴・傷閩鄉泉因・牡丹と題す。内容は一部異同が認められる(「研究」『釈疑』23頁)。この作中の貧困を詠じたところが壮衰書に通ずるものがある。
- (6) 小瀬甫庵の『信長記』は江戸初期に成った仮名草子。古活字本(元和八年)、寛永元年本・寛永十二年本等の整版本の他古写本も数点存在する。古典文庫本は松沢智里氏蔵寛永頃写本。信長の家臣甫庵が太田牛一の『信長公記』(「原本信長記」)を増補改削した信長の一代記。
- (7) 東福寺は京都市東山区に在る臨濟宗の禪寺。円爾(聖一國師)開山、建長七年(一二五五)落慶供養。禪・天台・真言兼修。京都五山の一。
- (8) 昌叱は里村姓。紹巴の門人の連歌師。秀吉に寵愛される。
- (9) 心前は里村支那。心前と号す。紹巴の子。連歌に名あり。
- (10) 半井驢庵は名は光成。瑞策、通仙院等と号す。父の明親より驢庵を襲名、代々これを襲う。医術に優れ、信長・秀吉の厚遇を受ける。
- (11) 雖知苦院道三は医師。名は曲直瀬正慶。一溪・道三と称し、雖知苦斎・翠竹院等と号す。「三体詩」や東坡・山谷を愛讀。正親町帝より宸筆の「古今集」を賜わる。その著「啓迪集」には僧策彦が序を書き、足利義輝をはじめ、信長、秀吉、家康等に寵遇を受ける。茶は千利休に学ぶ。
- (12) 木曾義仲の入京は寿永二年(一一八三)七月二十八日。十一月十九日には義仲、後白河法皇御所を襲う。翌年の元暦元年一月二十日に源範頼・義経軍に敗死。
- (13) 三方論議とは法門を明らかにするために三人の僧が議論を戦わせること。「維摩経」「法華経」を中心に論議するものから儒・仏・道における論戦も行われた。季の統経、宮中御齋會、興福寺維摩會や長谷寺の報恩講論議等各種の論議がある。信長は浄土宗と法華宗(日蓮宗)の僧と論議(安土宗論)させた例もある。また真言・天台の論議もある。或は町中での三僧における論議かも知れない。
- (14) 「当代記」は江戸時代初期の成立。安土桃山時代から江戸時代初期にかけての政治・社会の出来事を編年体にしたもの。九巻。「史籍雜纂」二所収。この本文佐竹昭広氏の教示による。
- (15) 狩野永徳は安土桃山時代の画家。障壁画を得意とする。大徳寺聚光院の襖絵「花鳥図」「翠棋書面図」や天正二年(一五七四)、信長が上杉謙信に贈った「洛中洛外図」は有名。安土城の障壁画も描いている。

る。

(16) 狩野宗秀も兄の永徳とともに障壁画を得意とする。「四季花鳥図」「三十六歌仙図」等の作がある。

(17) 『禪林句集』二巻は『句双紙』とも言う。東陽英朝(一四二八—

五〇四)編。貞享五年(一六八八)卓己が増補し刊行。經典・祖録・儒書・詩文等から一言より八言対にして、禪門で用いる秀句、佳句を

五千余首を収集したもの。各句には典故が示してある。

(18) 『逸周書』は周の誥誓・号令等を記録したもの。中国の戦国時代頃成立したという。

(19) 『史記』には『周書』の引用が八例ほど見られる。

右の外、黄齒・衢眼・敦魯等には本学大学院生の妹尾昌典君の教示を得た。紙上を借りて謝意を表す次第である。

(成城大学文学部教授)